

藤戸石

藤戸は有名な 12 世紀の戦の場所であり、藤戸の石（藤戸石）は戦の勝利に関連付けられました。国で最も有名な石として知られており、次々と藩主に求められ、最終的には豊臣秀吉（1537-1598）が所有し、京都の聚楽第の庭に置きました。秀吉は、1598 年に醍醐寺の丘陵で行われたお花見のあと、藤戸石を三宝院の建設中の庭に持ち込むことを命じました。そこで藤戸石は庭園の「主人石」として機能することになりました。

藤戸石は、庭園内の配置に基づいて仏教的にも解釈されます。藤戸石は 2 つの小さな石に挟まれており、これら 3 つの石は合わせて阿弥陀三尊とみなされます。阿弥陀三尊とは、阿弥陀と 2 人の菩薩が天界から降り、信者を極楽浄土に迎え入れる様子を示すものです。